

研究ノート

伝承・民話等をテーマとした陶磁器デザイン開発

宮田昌俊^{*1}、長谷川恵子^{*1}

Pottery Design Development by Legend Folktale

Masatoshi MIYATA^{*1} and Keiko HASEGAWA^{*1}Seto Ceramic Research Center, AITEC^{*1}

瀬戸市の商店街に伝承される題材をテーマにしたデザイン開発を行った。本研究において作製した試作品は市民参加によるワークショップや観光客向けイベントで活用された。本研究により伝承・民話など地域の文化資源を活用した開発手法がノベルティ商品分野においても有効であることを確認した。

1. はじめに

県内の観光地では、それぞれの地域に伝わる伝承・民話、伝統芸能等を、日常的に用いる食器に親しみやすく身近な形で表現することにより、観光客に対し、その地域をより強く印象付けることで呼び込みを図りたいという要望がある。そこで、本研究では瀬戸市に伝わる伝承・民話、伝統芸能等をテーマとし、それらを食器類に展開したデザイン開発を行うことにより、産地の活性化及び地域資源の発掘・保存に貢献するものである。

2. 実験方法

2.1 調査対象

瀬戸市発行の『瀬戸市史』民俗編¹⁾を資料とし、この中から、平安時代より続く深川神社の門前町である「末広町」を取り上げ、ここに古くからシンボルとして伝わる“孔雀”を今回の伝承の対象とした。

2.2 アイテムの選定

国産ノベルティは明治後期の玩具生産に始まり、瀬戸で造られた精巧な製品が大正・昭和を通じて欧米に輸出されてきた歴史がある。今回は、食器と併せてこのノベルティを取り上げ、瀬戸市の地域性のある商品開発とした。

2.3 デザインの開発

末広町商店街振興組合及び陶友会（ノベルティメーカー5社で構成）と検討を重ね、ノベルティ用（立体）と食器の転写用（平面）の二つのデザインを行った。立体のデザインを図1、平面のデザインを図2に示す。

二つのデザインにおいては“末広”がりという意味合いで古くから使われてきた孔雀のシンボルを、現在の瀬戸の狛犬や招き猫のように市民権を得たキャラクターとなるように、幅広い層に親しまれる今風の“ゆるキャ

ラ”や“ご当地キャラ”的なものとし、候補のスケッチ4案の中から最終的に末広町商店街振興組合が選定を行った。決定したスケッチに基づき、ノベルティ用の立体化と転写紙用のイラスト化を行った。寸法及び形状は以下のとおり。

ノベルティ高さ：50mm、横幅：53mm、奥行：36.5mm
皿直径：250mm、転写直径：100mm

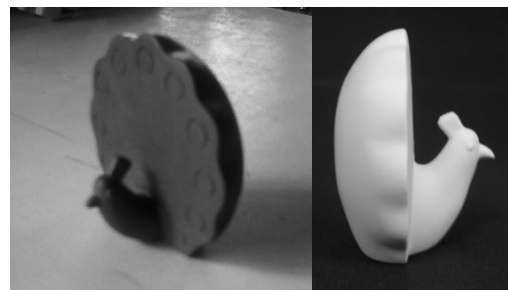


図1 粘土原型と鑄込素地



図2 孔雀イラスト

3. 試験結果及び考察

3.1 素地

素地は、愛知万博で紹介された地元産リサイクル素地を使用し、長石にはFN-100を使用した。その配合割合を表1に示す。

^{*1} 瀬戸窯業技術センター 応用技術室

表1 素地配合割合

原料	配合割合 (wt.%)
磁器セルベン	49.5
FN-100	2.3
珪砂	14.7
蛙目粘土	31.1
カオリン	2.4
計	100.0

3.2 釉薬

釉薬は、高嶋廣夫博士（元名工試）のご助言によりリサイクル素地用に調整したものを使用し、フリットにはU-fluxを使用した。その調合割合を表2に示す。

表2 釉薬調合割合

原料	調合割合 (wt.%)
砂婆	34.5
木節粘土	8.8
U-flux	10.7
ドロマイト	24.1
珪石	21.9
計	100.0

3.3 試作品

ノベルティ（立体）と下絵転写を貼った食器（平面）の二種の試作を行った。孔雀ノベルティを図3、下絵転写皿を図4に示す。



図3 孔雀ノベルティ



図4 下絵転写皿

3.4 成形・焼成

ノベルティ及び下絵転写皿の製作プロセスは以下の

手順で行った。

素地→鑄込用泥しょう調整→石膏型鑄込成形（食器は圧力鑄込成形）→排泥→脱型→乾燥→素焼き（その後、染付及び転写）→施釉後、1280℃還元焼成 10h



図5 瀬戸蔵でのワークショップ風景



図6 末広町商店街店舗での展示風景

4. 結び

ノベルティメーカーと地元商店街振興組合と共同で、地元商店街に伝承される題材をテーマにしたデザイン開発を行った。作製した孔雀のノベルティは、瀬戸市制施行 80 周年記念イベント「陶のあかり路」の市民ワークショップ（10/17）で活用され、参加者により絵付けされたものが末広町商店街の店舗（旅館：松千代館）で展示された（12/5～20）。ワークショップを図5、その展示風景を図6に示す。本研究により、地域の文化資源（題材）を活用した開発手法がノベルティ商品分野においても有効であることを確認した。

謝辞

本研究は、瀬戸市産学連携等新製品新技術開発支援補助事業により陶友会並びに末広町商店街振興組合、当センターが共同で実施したものである。ご協力頂いた関係各機関に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 瀬戸市史編纂委員会、『瀬戸市史 民俗編』, P407 (2006), 愛知県瀬戸市